母親のキャンプ経験とキャンプに対する態度との関連

飯田　稔・井村　仁・影山義光

Relation of Mother's Camp Experience to the Camp Attitudes

Minoru IIDA, Hitoshi IMURA, Norimitsu KAGEYAMA

There is sufficient testimony from researchers to support the view that camping is of value to children and to justfy making the experience available to all. Recognition of camp values comes often from campers many years after they have attended camp. It is significant to notice how many parents who have been to camp themselves want camping for their children.

The purpose of this study was to investigate relation of mother's camp experience to their camp attitudes. The survey, consisting of eight questions related to the camp attitudes, was mailed out to a total of 647 mothers who had fourth to sixth graders. Out of them mailed out, 381 responded for 58.9% response rate. The subjects were selected and divided into three groups, unexperienced (N=81), experienced (N=60) and staff(N=42) in accordance with their camp experience. The mean camp attendance day was 11.2 for experince group, and 113.2 for staff group. The ages ranged from 30 : 2 to 44 : 8 with a mean age of 38 : 6.

It was found that mothers who had camp staff experience showed significantly better image of camp, younger camper age as desirable, longer camp period, higher ratio of camp attendance for children, more active attitude on first-time camp attendance for them, more influential decision-making on first-time camp attendance for them, and higher and more extensive expectation of camp effects than mothers who had camp experience as campers. There was no relation of camp priority in other summer activities for children between the experienced and staff groups. Mothers who had not camp experience showed the least positive attitudes in three groups. The results indicate that there is a close relation of mother's camp experience to their camp attitudes, in which mothers who have longer and more intensive camp experience possess more positive camp attitudes than other mothers.

社会環境の変化にともない，自然の中で，子供達が集団で活動する場がますます減少する傾向にある。キャンプは，レクリエーションと教育の両方に貢献するユニークな活動であると一般に考えられている。キャンプが子供の成長発達に価値があることは，キャンプを経験した子供，キャンプに子供を参加させた両親，キャンプ指導者，そしてキャンプ研究者らによって実証されている[15]。

Carlson[2]は，キャンパーはキャンプに参加してから長年たってキャンプの価値を認識し，親になってから自分の子供のためにキャンプを希望するようになり，伝統のあるキャンプは，以前キャンパーであった親の子供達であふれている，と述べている。また，Goldsmith[5]もキャンプが好きになったり，キャンプのことを考えるようになるのは，両親，兄弟，遊び友達を通してであり，子供がキャンプに初めて参加するのにもっともポジティブで，説得力のある保証は，価値あるキャンプ経験をもった両親によってである，と説明している。これらのことから，親のキャンプ経験とキャ

ンプに対する態度が，キャンプに対する考え方や子供のキャンプ参加に深い関連をもっていることが示唆される。

キャンプ関係の研究において，親のキャンプ経験やキャンプに対する態度について調査したものはあまりみられない。Altman[1]と Cartwright[3]は，親が子供をキャンプに参加させる理由について調査している。わが国では，倉本ら[11]がキャンプ参加者の母親の意識について，子供の理想像，キャンプに対する期待，キャンプの効果を報告し，飯田は幼児キャンプ参加者の母親の養育態度[6]，母親の不安[9]について発表している。

本研究は以上の点を踏まえ，キャンプ年齢にあたる少年期の子供に強い影響力をもつと考えられる母親を対象に，母親のキャンプ経験の違いが，キャンプに対する態度にどのように関連しているかを分析しようとするものであり，具体的にはキャンプに対する態度として次の諸要因をとりあげ検討した。

1．キャンプのイメージ
2．望ましいキャンプ初参加学年
3．望ましいキャンプ期間
4．夏期行事におけるキャンプ優先度
5．子供のキャンプ参加の有無
6．子供のキャンプ初参加への積極性
7．子供のキャンプ初参加の決定者
8．キャンプの効果

なお，ここでいうキャンプとは，組織キャンプ（Organized Camp）をさし，自然環境の中で，集団生活を通して，有能な指導者とともに，自然環境資源を活用することによって，知的，身体的，社会的，情緒的発達を促進することを目的にしたものをいう。ただし，期間を3泊4日以上，学校キャンプを除くものとした。母親のキャンプ経験は，キャンプ未経験者，キャンプ経験者，カウンセラーなどの指導経験者の3群（以下，未経験者群，経験者群，指導者群とよぶ）に分類した。

研究方法

調査対象　指導者群は，朝日新聞大阪厚生文化事業団，東京ＹＭＣＡ，東京ＹＷＣＡが主催するキャンプで，過去にキャンプカウンセラーおよびスタッフとして指導した経験をもち，キャンパー年齢の子供をもつと予測される35才以上の母親をスタッフ名簿から抽出した。これら3つのキャンプは，いずれも古い伝統があり，現在もわが国のキャンプの指導的役割を果しているという観点から選ばれた。スタッフ名簿から計124名（各々53名，46名，25名）の該当者に調査を依頼したところ，78名の回答を得た。回収率は62.9%であった。その中からさらに，小学校高学年（4～6年）の児童をもつ42名を選び指導者群とした。

経験者群と未経験者群については，小学校高学年の児童をもつ母親を，東京および茨城県の研究学園都市から選び調査を依頼，回収した。被調査者523名中回答者数は303名で，回収率は57.9%であった。回答者のうち，キャンプ経験のある母親60名を経験者群とし，243名のキャンプ未経験者のうち3分の1にあたる81名を無作為に抽出し，これを未経験者群とした。したがって，本研究の最終調査対象者数は，未経験者群81名，経験者群60名，指導者群42名，計183名である。

調査対象者の平均年齢は38.6才で，3群間に大きな差はみられなかった。キャンプ経験については，平均キャンプ日数が経験者群で11.2日，指導者群で113.2日であった。

調査時期　未経験者群，経験者群に対しては昭和57年6月，指導者群は昭和56年11月に郵送法により質問紙を回収した。

結　果

1．キャンプのイメージ

母親がキャンプに対してもっているイメージを把握するために，長島[13]，加藤[10]の研究で用いられたＳＤ法の尺度（形容詞対）の中からキャンプに適した30項目を抽出し，予備調査の結果から寄与率の高い20項目を選択した。形容詞対の各々に，「とても」，「かなり」，「すこし」の計6段階評定尺度により回答を求めた。

3群全体では，キャンプのイメージはポジティブなものであり，項目別には，7)健康的な，11)陽気な，12)活動的な，15)たくましいが顕著であった。さらに，未経験者群，経験者群，指導者群になるにつれて，キャンプに対してよりよいイメージをもつ傾向を示している。

3群に有意差の認められた項目について，キャンプのイメージのプロフィールを図1に示した。また，イメージに関して3群間の一元配置分散分

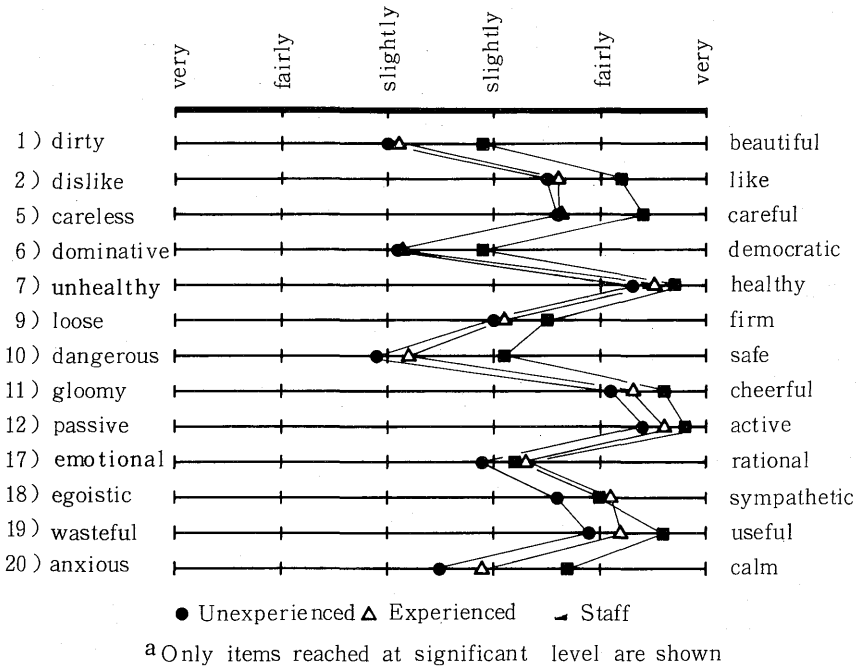


Fig. 1 Profile of Mean Image Scores for Three Groups[a]

析と2群間のt検定の結果を示したものが表1である。分散分析から13項目に有意差が認められたが，2群間のt検定の結果によれば，未経験者群と経験者群の間には，17)理性的な，18)思いやりのある，の2項目に有意差が認められた。次に，経験者群と指導者群の間では，1)きれいな，2)好きな，5)注意深い，6)民主的な，7)健康的な，9)けじめのある，10)安全な，11)陽気な，19)有益な，20)安心な，の10項目に有意差がみられた。また，未経験者群と指導者群では，12)活動的な，18)思いやりのある，の2項目が上記の10項目に追加され，12項目であった。したがって，キャンプのイメージに関しては，未経験者群，経験者群，指導者群になるにつれてよりよいイメージをもっているが，未経験者群と経験者群の差は小さく，未経験・経験者群と指導者群の間には顕著な差が認められる。

2．望ましいキャンプ初参加学年

子供を初めてキャンプに参加させるのに最も望ましいと思われる学年を調査し，整理した結果，3群全体では，小学校高学年（4～6年）が望ましいとする回答が123名（67.2%）で，約3分の2を占め，ついで小学校低学年以下が47名（25.7%）で4分の1であった。この中には幼児と回答した8名（4.4%）が含まれている。中学生以上は13名（7.1%）と少なかった。

3群間の学年を比較したものが表2である。小学校低学年以下の参加を望ましいと考える割合が，未経験者群（17.3%），経験者群（26.7%），指導者群（40.5%）になるにつれて5%水準で有意に増加している。したがって，指導者群ほど，早期に，低学年のうちに子供をキャンプに参加させることが望ましいと考えており，経験者群，未経験者群の順に学年が高くなっている。

3．望ましいキャンプ期間

子供が参加するキャンプの日程は，何日間が望ましいと思うかについて調査した。全体的には，3泊4日が74名（40.4%）で最も高く，2泊3日とした20名（10.9%）を含めると全体の半数を占めている。以下4泊5日（24.0%）が続き，5泊6日(12.6%)，6泊7日以上(12.0%)の順になっている。

Table 1. Difference in Mean Camp Image Scores for Three Groups

Item	Unexperienced		Experienced		Staff		F	Unexperienced[a] VS Experienced	Experienced[a] VS Staff	Unexperienced[a] VS Staff
	M	SD	M	SD	M	SD				
1)	3.0	1.21	2.9	1.28	2.1	1.03	8.81***	NS	3.45***	4.19***
2)	4.5	1.24	4.6	1.41	5.2	1.39	4.32*	NS	2.18*	2.95**
5)	4.6	1.05	4.6	1.00	5.4	0.73	11.62***	NS	4.98***	4.86***
6)	2.9	1.20	2.9	1.30	2.1	1.18	6.38**	NS	3.01**	3.14***
7)	5.3	1.11	5.5	0.75	5.8	0.48	4.30*	NS	2.01*	3.35***
9)	2.0	0.91	1.9	0.95	1.5	0.74	3.95*	NS	2.20*	2.77**
10)	3.1	1.24	2.8	1.22	1.9	0.98	14.61***	NS	4.30***	5.41***
11)	5.1	0.86	5.3	0.87	5.6	0.50	5.11**	NS	2.17*	3.93***
12)	5.4	0.98	5.6	0.67	0.8	0.43	3.69*	NS	NS	3.11**
17)	3.9	1.07	4.3	1.07	4.2	1.03	3.03*	2.32*	NS	NS
18)	4.6	1.01	5.1	0.80	5.0	0.76	6.10**	3.10**	NS	2.37*
19)	4.9	0.98	5.2	0.85	5.6	0.62	9.12***	NS	2.98**	4.84***
20)	3.5	1.19	3.9	1.36	4.7	0.92	13.92***	NS	3.61***	5.71***

＊P＜.05　＊＊P＜.01　＊＊＊P＜.001
[a]: t values are shown

3群間のキャンプ期間を比較したのが表3である。未経験者群では3泊4日以下が57名(70.4%)と最も高く，経験者群では，29名（47.5%）であるが，両群ともキャンプ期間が長くなるにつれてその割合が減少している。指導者群では，6泊7日以上が15名（35.7%）と最も高く，3泊4日以下は8名（19.0%）と最も低く，前述の両群と逆の現象を示している。x^2検定の結果，0.1%水準で有意差が認められた。したがって，キャンプ未経験者，キャンプ経験者，指導経験者になるにつれて，長期間のキャンプを望んでいる。

4．夏期行事におけるキャンプ優先度

キャンプ不参加の主要な理由として，キャンプが夏休み中の家族旅行，クラブ活動，登校日，学習塾などの行事や活動と重なることがあげられる。これらの夏期行事におけるキャンプ参加の優先順位を明らかにするために調査を行なった。

行事ごとの優先順位の頻度を3群全体として示したものが表4である。各行事の1位から5位までの各々に5～1点までの重みづけをした得点を比較してみると，キャンプ(691点，25.1%)が最も高く，ついで家族旅行（626点，22.8%），クラブ活動(600点，21.9%)，登校日(504点，18.4%)の順で，学習塾(324点，11.8%)は極端に低かった。　夏期行事のうちキャンプだけの優先順位をとりあげ3群の比較をしたところ，経験者群と指導者群の間にはほとんど差はみられなかった。そこで，キャンプ経験者と指導経験者を一つの群とし，キャンプ未経験者と比較したところ，表5に示した通り0.1%水準の有意差が認められた。したがって，夏期行事におけるキャンプの優先度では，経験者群と指導者群に差はないが，両群とも未経験者群よりキャンプを優先させている。

5．子供のキャンプ参加の有無

子供が実際にキャンプに参加したことがあるかどうかを調査したところ，全体的には3分の2にあたる113名（61.7%）の母親が子供をキャンプに参加させていた。キャンプ参加の有無について3群間で比較したものが表6である。未経験者群（36名，44.4%)で約半数，経験者群(41名，68.3%)で3分の2，そして指導者群(36名，85.7%)の場合には大部分の母親が子供をキャンプに参加させている。x^2検定の結果，1%水準で有意差が認められ，スタッフ経験者が最も子供をキャンプに参加させ，続いてキャンプ経験者，そしてキャンプ未経験者は最も低い参加率を示した。

6．子供のキャンプ初参加への積極性

子供をキャンプに参加させた母親113名を対象に，キャンプに初めて参加させた時，どの程度積

Table 2. Desirable Grade of First-time Camp Attendance for Child

Group	N	Under 3rd Grade	4th to 6th Grade	Upper 7th Grade
		f (%)	f (%)	f (%)
Unexperienced	81	14 (17.3)	60 (74.1)	7 (8.6)
Experienced	60	16 (26.7)	42 (70.0)	2 (3.3)
Staff	42	17 (40.5)	21 (50.0)	4 (9.5)
			$X^2=10.19$	$P<.05$

Table 3. Desirable Camp Period for the Child

Group	N	Under 4 Days	5 Days	6 Days	Upper 7 Days
		f(%)	f(%)	f(%)	f(%)
Unexperienced	81	57(70.4)	15(18.5)	6(7.4)	3(3.7)
Experienced	60	29(48.3)	19(31.7)	8(13.3)	4(6.7)
Staff	42	8(19.0)	10(23.8)	9(21.6)	15(35.6)
				$X^2=46.97$	$P<.001$

Table 4. Frequency and Percentage of Priority Order of Child's Camp Attendance in Summer Activities

Activity	1st	2nd	3rd	4th	5th	Total S'core
	f(%)	f(%)	f(%)	f(%)	f(%)	S(%)
Camp	65(35.6)	52(28.4)	36(19.6)	20(10.9)	10(5.5)	691(25.1)
Family Trip	49(26.8)	50(27.3)	30(16.4)	37(20.2)	17(9.3)	626(22.8)
Club Exercise	29(15.8)	50(27.3)	61(33.4)	29(15.8)	14(7.7)	600(21.9)
School Attendance	35(19.1)	18(9.8)	33(18.0)	61(33.4)	36(19.7)	504(18.4)
Preparatory School	5(2.7)	13(7.2)	23(12.6)	36(19.7)	106(57.8)	324(11.8)

Table 5. Priority Order of Child's Camp Attendance in Summer Activities

Group	N	1st	2nd	3rd	4th	5th
		f(%)	f(%)	f(%)	f(%)	f(%)
Unexperienced	81	25(30.9)	17(21.0)	18(22.2)	15(18.5)	6(7.4)
Experienced Staff	102	40(39.3)	35(34.3)	18(17.6)	5(4.9)	4(3.9)
					$X^2=12.04$	$P<.01$

極的であったかを，「非常に積極的」から「消極的」までの5段階評定尺度により回答を求めた。全体的には，「非常に積極的」(48名，42.5%)，または「かなり積極的」(49名，43.4%)態度を示し，大部分の母親が積極的であった。

中立または消極的回答（4名，3.5%）を除いた3段階評定尺度により，3群間の積極性を比較したものが表7である。「非常に積極的」が未経験者群（9名，25.7%）で4分の1であったが，経験者群（13名，34.2%）では3分の1に，さらに指導者群(26名，72.2%)では顕著に増加している。x^2検定の結果，1%で有意差が認められた。したがって，指導者群ほど子供のキャンプ参加に積極的で，未経験者群は最も低く，経験者群はその間にある。

7．子供のキャンプ初参加の決定者

子供を初めてキャンプに参加させた時，最終的

に決定した人を調べたところ，全体では，子供自身（54件，47.8%）が最も多く，続いて母親（37件，32.7%），父親（16件，14.2%），その他（6件，5.3%）であった。その他には，キャンプ指導者，祖父母が含まれていた。

その他を除いたキャンプ参加決定者について，3群間の比較を表8に示した。母親が決定者になっている割合は，指導者群（20名，55.6%）が約半数で最も高く，ついで経験者群（12名，32.4%）が3分の1であり，未経験者群（5名，14.7%）が最も低かった。一方，子供自身が決定者になっている割合は逆に，未経験者群，経験者群そして指導者群の順で，父親が決定者になっているのは10～20%であったが一定の方向は見出せなかった。x^2検定の結果，1%で有意差がみられた。したがって，スタッフ経験者では母親が子供の参加を決定し，キャンプ未経験の母親では子供自身が決定しており，キャンプ経験のある母親はこの間にある。

8．キャンプの効果

キャンプの文献の中から，キャンプの価値や効果，目標について書かれた具体的な項目を選択，整理し，25項目を設定し，キャンプの効果として「非常に期待できる」，「かなり期待できる」，「すこし期待できる」，「期待できない」の4段階評定尺度により調査した。予備調査の結果，すべての項目に高い寄与率が認められた。

全体的には，すべての項目でポジティブな効果が期待されており，項目別では，1)健康的生活を送る，2)新しい友人をつくる，3)自然の美しさ，偉大さを理解する，7)協力して仕事や活動をする，8)自分のことは自分でする，9)忍耐強くなる，22)責任をもって仕事をやりとげるの6項目が高い効果があると評価された。

3群間に有意差が認められた項目について，キャンプの効果のプロフィールを図2に示した。また，キャンプ効果に関して3群間の一元配置分散分析と2群間のt検定の結果を示したものが表9である。分散分析の結果，25項目中10項目に有意差が認められ，いずれの項目においても未経験者群，経験者群，指導者群になるにつれてキャンプの効果に対する期待が大きいことがわかる。さらに，2群間のt検定によれば，未経験者群と経験者群の間には，3)食べ物の好ききらいが少なくなる，9)忍耐強くなる，18)早寝早起きをする，19)自立心が養われるの4項目，経験者群と指導者群の比較では，4)性格が明るくなる，15)自然を利用した工作に興味をもつの2項目に有意差が認められた。また，未経験者と指導者の間には，上述の6項目の他に，1)健康的な生活を送る，5)自然の美しさ，偉大さを理解する，22)責任をもって仕事をやりとげる，24)創意工夫をするの4項目，計10項目に有意差が認められた。したがって，キャンプの効果に関しては，未経験者群，経験者群，指導者群になるにつれてより大きな期待をかけており，未経験者群と指導者群の間にはかなりの差があるが，経験者群と指導者群の差は少ない。

考　察

以上の結果について考察すると，母親のキャンプ経験の違いがキャンプに対する態度に深く関連していると考えられる。

キャンプのイメージでは，場としての野外環境，民主的な集団生活，魅力的で多様な活動，節度のある健康的生活，有能な指導者の存在，そして目標としての教育といった組織キャンプのイメージが，キャンプ経験の豊かな母親ほどポジティブなものであった。未経験者群と経験者群のイメージの差がそれほど大きくなかったのは，本調査の未経験者群の中に，学校キャンプ参加者や2泊3日のキャンプを経験している母親が含まれている可能性があるためと考えられる。反対に，経験者群と指導者群に顕著な差が認められたのは，キャンプの平均日数が，11日と113日と大きな違いがあったためと推測される。

初めてキャンプに参加させるのに望ましい学年として，小学校高学年が全体の3分の2を占め，また望ましいキャンプ期間では，2泊3日と3泊4日を合わせると半数に達していた。これは，わが国の一般的な学校キャンプや団体キャンプが実施している学年層と期間を反映しているものと思われる。

キャンプ経験の豊富な母親ほど，早期にキャンプに参加させることを望んでいるが，Goldsmith[5]は子供にキャンプを初めて経験させる時期は，一般に考えられているよりもかなり早い時期であるとし，Shivers[14]は，多くの子供達が4才の時に最

初のキャンプをすると述べている。飯田[6)7)9)]は，幼児の段階でもキャンプ生活に十分適応し，効果をあげることができることを幼児キャンプの成果として報告し，キャンパーの低年齢化を主張している。また，本調査に参加した朝日キャンプや東京ＹＭＣＡでは，幼児や低学年児童が参加できるコースを設けていることも影響しているものと考えられる。

望ましいキャンプ期間についても，指導者群が最も長期で6泊7日以上が35.7%を占めていた。飯田[8)]がアメリカの公認キャンプについてコースごとの実施日数を調査したところ，1～2週間が最も多く45.6%で，ついで5～6日(28.4%)，残りは2週間以上のキャンプだった。キャンプで効果をあげるには，長期間の方が望ましいということをキャンプを経験してゆく中で認識するためであろう。福田[4)]の中学校教師を対象にした調査では，2泊3日が66.3%，1泊2日が18.9%であった。各種の条件の違いがあることを考慮しなければならないが，本調査の結果と比較するとかなり短期間であることが特徴的である。

3群のすべてにおいて，夏期行事の中でキャンプが最も優先されたことは，キャンプの価値や教育的効果が一般的にかなり広く認識されていることの現われであると推察される。

子供のキャンプ参加の有無では，キャンプ経験の豊かな母親ほど子供をキャンプに参加させる比率が高い。そして，子供が初めてキャンプに参加する時には積極的な態度で臨み，参加決定に最も強い影響を与えている。これらの結果は，Carlson[2)]やCartwright[3)]の説と一致するものであり，母親のキャンプ経験と子供のキャンプ参加には深い関連があることを示している。

キャンプの効果については，10項目で3群間に差がみられ，指導者群ほど高い効果を期待しているが，内容的には性格・行動，自然理解，生活習

Table 6. Child's Camp Attendance

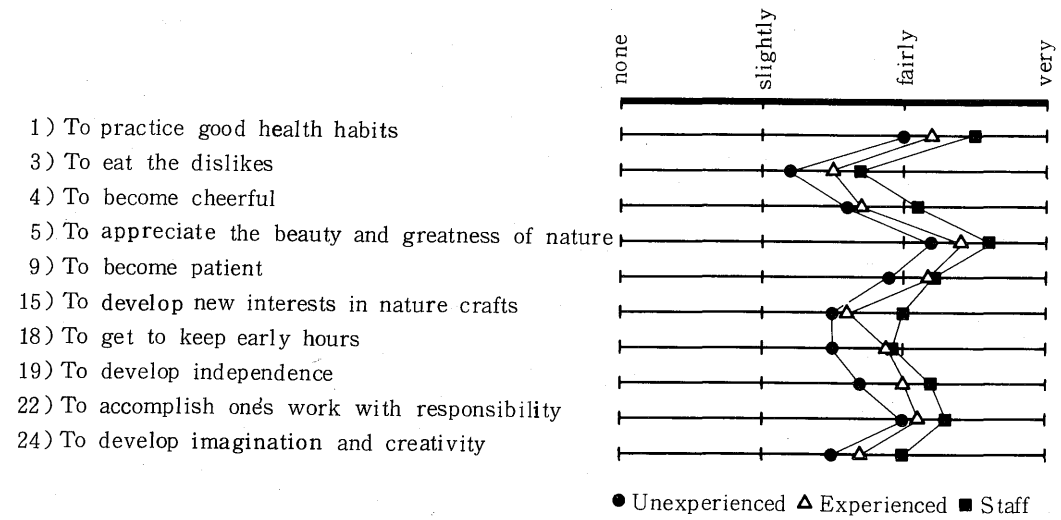
Group	N	Yes	No
Unexperienced	81	36(44.4)	45(55.6)
Experienced	60	41(68.3)	19(31.7)
Staff	42	36(85.7)	6 (14.3)
		$\chi^2=21.58$	P<.01

Table 7. Positive Level toward Child's First-time Camp Attendance.

Group	N	Very	Fairly	Slightly
		f(%)	f(%)	f(%)
Unexperienced	35	9(25.7)	21(60.0)	5(14.3)
Experienced	38	13(34.2)	20(52.6)	5(13.2)
Staff	36	26(72.2)	8(22.2)	2(5.6)
			$X^2=17.87$	P<.01

Table 8. Decision-maker on Child's First-time Camp Attendance.

Group	N	Mother	Father	Child
		f (%)	f (%)	f (%)
Unexperienced	34	5(14.7)	7(20.6)	22(64.7)
Experience	37	12(32.4)	4(10.8)	21(56.8)
Staff	36	20(55.6)	5(13.9)	11(30.5)
			$X^2=14.17$	P<.01



[a]Only items reached at significant level are shown

Fig. 2 Profile of Mean Camp Effect Scores for Three Groups[a]

Table 9. Differences in Mean Camp Effect Scores for Three Groups.

Item	Unexperienced		Experienced		Staff		F	Unexperienced[a] VS Experienced	Experienced[a] VS Staff	Unexperienced[a] VS Staff
	M	SD	M	SD	M	SD				
1)	3.0	0.77	3.2	0.72	3.5	0.74	5.41**	NS	NS	3.23**
3)	2.2	0.83	2.5	0.87	2.7	0.89	6.15**	2.33*	NS	3.35***
4)	2.6	0.80	2.7	0.79	3.1	0.84	5.20**	NS	2.28*	3.17**
5)	3.2	0.77	3.4	0.72	3.6	0.67	4.23*	NS	NS	2.85**
9)	2.9	0.77	3.2	0.80	3.2	0.68	4.79**	2.64**	NS	2.48*
15)	2.5	0.82	2.6	0.81	3.0	0.88	3.99*	NS	2.38*	2.63**
18)	2.5	0.92	2.9	0.92	2.9	1.06	3.61*	2.40*	NS	2.09*
19)	2.7	0.91	3.0	0.68	3.2	0.79	5.89**	2.53*	NS	2.95**
22)	3.0	0.79	3.1	0.71	3.3	0.61	3.35*	NS	NS	2.56*
24)	2.5	0.82	2.7	0.79	3.0	0.83	4.48*	NS	NS	2.93**

* $P<.05$ ** $P<.01$ *** $P<.001$

[a] t values are shown

慣の3つに分類されよう。倉本ら[11]の研究では，キャンプに子供を参加させた母親がキャンプの効果としてあげた項目として，自信をもって行動する，クラフトに興味をもつ，自然に興味をもつ，友達と仲よくする，自分のことを自分でする，をあげている。すなわち，性格・行動，自然理解の点で効果があったとしている。また，松本ら[12]の報告では，ご飯を残さず食べる，家の手伝いをする，といった生活習慣の向上は認められたが，性格面での変化はみられなかった。本研究の結果から，母親のキャンプ経験が豊富であれば，それだけ広範で，高度なキャンプの効果を期待していると考えられる。

経験者群と指導者群に大きな差が認められな

かったのは，キャンプの多様性によるものと思われる。キャンプは，その哲学や方針にそって目標を設定し，独自のキャンプ効果をあげることを目ざしている。本研究の経験者群と指導者群の対象は，いろいろなキャンプから抽出されており，その効果も多様であることから両群間に顕著な差が現われなかったものと推察される。

結　論

母親のキャンプ経験から，未経験者群（N＝81），経験者群（N＝60），指導者群（N＝42）の3群に分類し，キャンプに対する態度の違いを明らかにするために，郵送調査法によりデータを回収し，分析した。

結果は次の通りである。

1．キャンプのイメージに関しては，組織キャンプの特徴的なイメージが想起されており，未経験者，経験者，指導経験者になるにつれてよりよいイメージをもっているが，未経験者と経験者の間の差は小さい。

2．望ましいと思われるキャンプ初参加学年では，全体的には小学校高学年であるが，指導経験者になるほど低学年化し，小学校低学年が優位になる。

3．望ましいキャンプ期間については，指導経験者は長期間を，逆に未経験者は3泊4日以下の短期間のキャンプを望んでいる。

4．夏期行事において，未経験者，経験者，指導経験者のいずれもがキャンプを第1優先にあげているが，未経験者に比べて経験者と指導経験者はキャンプをより優先している。

5．母親のキャンプ経験の程度と子供のキャンプ参加には深い関連があり，指導経験者ほど子供をキャンプに参加させている。

6．子供を初めてキャンプに参加させる時，大部分の母親が積極的であるが，指導経験者は最も積極的である。子供のキャンプ初参加に際して，指導経験者は母親が決定者となり，未経験者は子供自身が決定者となるが，父親が決定者になることは少ない。

7．キャンプの効果に関しては，性格・行動の変容，自然理解，生活習慣の改善が期待されているが，指導経験者になるほど広範で，高度な効果を期待している。

以上の結果から，母親のキャンプ経験が豊富であればあるほど，それだけキャンプに対する意識が高く，好ましい態度をもち，相互に密接な関係にあると結論づけることができる。

今後の課題として，1)母親のキャンプ経験と子供のキャンプに対する態度の関連を調べる，2)キャンプ指導経験のある母親と現役の女子カウンセラーのキャンプに対する態度を比較する，3)父親のキャンプ経験とキャンプに対する態度を調査し，母親と比較する，4)キャンプに対する態度と社会・経済的要因との関連を調査する，5)キャンプ・イメージとキャンプ効果について因子分析を行ったが，明確に解釈できる結果を得ることができなかった。妥当性のあるテストを作成する必要があろう。

引　用　文　献

1) Altman, S. M., The Impact of Family Leisure Time Patterns on Jewish Camping, New York : National Jewish Welfare Board, 1975.
2) Carlson, R. E., The value of camping, Camping Magazine, 48 (2), pp 12-18, 1975.
3) Cartwright, K., Camping for one week ; a survey of parent reasons for selection of one-week sessions, Master's thesis, School of Social Work, University of Southern California, 1952.
4) 福田芳則，キャンプの期間についての基礎的研究 —— 中学校教員のキャンプ期間に対しての意識 ——，日本体育学会第33回大会号，p 379, 1982.
5) Goldsmith, C., The Child's Introduction To Camping, In CAMP…The Child's World, American Camping Association, pp 17-19, 1971.
6) Iida, M., Independence of Japanese kindergarten children associated with five-day resident camps, Doctoral dissertation, The Pennsylvania State University, 1976.
7) 飯田　稔，諸澄敏之，キャンプにおける幼児，小学校低学年児童の泣きに関する横断的研究，筑波大学体育科学系紀要，2．pp 87-94, 1979.
8) 飯田　稔，アメリカにおけるキャンプ場について，欧米のキャンプ場施設の事例の調査研究，日本余暇文化振興会，p 11, 1980.
9) 飯田　稔，年少児キャンプ参加者の母親の不安に関する研究，筑波大学体育科学系紀要，5．pp 47-58, 1982.
10) 加藤隆勝（編），現代青少年の人間関係，親子関係，教師生徒関係，友人関係の特質と生活感情，伊藤忠記念財団，1981.

11) 倉本満枝，飯田　稔，松田誠一，キャンプ参加者の母親の意識について，日本体育学会第32回大会号，p 682, 1981.
12) 松本克己他，小学校児童を対象としたキャンプの実践研究，第29回九州体育学会発表資料，1980.
13) 長島貞夫，藤原善悦，原野広太郎，斉藤耕二，堀洋道，自我と適応の関係についての研究(1)—Self-Differential 作製の試み，東京教育大学教育学部紀要 12. pp85-105, 1966.
14) Shivers, J. S., Camping : Administration, Counseling, Programming, Appleton-Century-Crofts, 1971.
15) van der Smissen, B. (ed), Bibliography of Research Related to Camping, Environmental Education, Adventure Progmames and Interpretive Service, American Camping Association, 1980.